

萬葉集にあらはれる赤色の特性

伊原 昭

萬葉集の歌の中で、赤といふ語を用ひて、赤い色彩を表現してゐるものを選び、次代の勅撰集の八代集、十三代集に見えるそれと比較してみると、用例頻度の上から、或は修飾する事物の上から、或は用法の上から、勅撰集には見られぬ万葉集独自の性格のいくつかを見出すことが出来る。

万葉集に詠まれてゐる赤色を、はじめに、用例数の上から考察してみると、八代集、十三代集と比較して、際立つて用例数が多い。したがつて、赤色用例数の種々な色彩語の用例を総計した全色彩語用例数に対する比も、万葉集が最も高くなつてゐる。数字で示してみると、八代集では、赤色用例数八で、全色彩語用例数一〇五八の、〇・八%、十三代集では、三で、二三五八の、〇・一%となつてゐるのに対し、万葉集では、赤色用例数は、三三あり、全色彩語用例数七二五の、五%を占めてゐる。このやうに、用例の絶対数も、用例比率も高いことから、万葉集での赤色は、他の集に比べ、優位を占めてゐることがわかり、用例数の多いことが、先づ、万葉集の赤色の特性の一つと云へるであらう。

次に、赤色によつて修飾されてゐる事物の上から眺めてみ

ると、万葉集には、柀、橘、馬（駒）、裳、帛、船、心や、赤色を含む枕詞によつて修飾されてゐる朝、日、膚、色妙子等がある。八代集には、もみぢ、魚、裳、錦等。十三代集には裳、紐、肌等がある。これを見ると、八代集、十三代集に比べて、万葉集に於ける赤色が最も広く種々の事物を修飾してゐることがわかる。万葉集では、赤によつて修飾されるこれ等の事物の中で、裳が一番用例が多い。裳は、八代集や十三代集にも、右に挙げたやうに見えてはゐるが、いづれも、後述するやうに、勅撰集撰集時代の歌人の作ではない。さらに遡つて、記紀歌謡等の上代の歌にも、赤色の裳は見えてゐないから、赤色の裳は、万葉集独特のものと考えてよからうと思ふ。

以上のやうに、赤色によつて修飾される事物の種類の多様であるといふこと、その中でも、裳が多く修飾されてゐるといふことが、又、万葉集の赤色の特性の一つと云ひ得ると思ふ。

さらに、赤色の用法の点から考へてみると、赤色の種々な事物を眼に映じたまま、赤によつてあらはすことは、万葉集以外の場合にも見られるところで珍らしいことではない。しかし、後述する「赤き心」のやうに、赤色から直感的に受けとつた表情、或は、性格等の心理的な感覚を以つて、實在の色を持たぬ事象を象徴的に修飾し、色相そのものから離れて、別な意味内容を表現する例があるのは、勅撰集に見られぬ万葉集独自の赤色の用法と云へる。

又、「赤らひく」の如く、枕詞の中に含まれて、日、朝、膚、色妙子（敷栲といふ説もある。）等を修飾してゐる赤色の用法も、勅撰集には無く、遡つて、記紀歌謡その他の上代の歌にも見えてゐないので、万葉集の赤の特種な用法と云へるやうに思ふ。

右のやうな諸点に、万葉集の赤色の特性がみられるが、そのうち、用例数の多いといふこと、或は、修飾されてゐる事物の種類が多様であるといふことは、八代集、或は、十三代集に比べ、万葉集所収歌の時代が比較的広く、殆んど上代文芸史の全域に亘つてゐること、歌人の階級層の甚だ広範囲であること、又、同時に、作歌地域の広汎であること等の環境による影響、或は、作者の感動の真実さ、それをあらはす態度の卒直さ等の人間性に基づく影響等によつて、歌が非常に多様性を持ち、複雑になつてゐたことに原因があるやうに思はれる。抽象的な云ひ方ではあるが、長期に亘る時代の種々な階層のもつ様な地域にある多種の赤色の事物が、あるがままに彼等に捉へられて、正直に写實的に詠みこまれたから、その用例頻度も、又、修飾事物の種類数も多くなつたと云へるのではないかと思ふ。

その他の特性については、以下、具体的に例歌を挙げながら考へてゆきたい。

まづ、万葉集独特の裳の赤色について考察してみよう。この用例数は、赤色用例数三三のうち、一一用例を占め、最も用例の多いものと云へる。どのやうに詠まれてゐるかと思ふ

と、

少女等が 少女さびすと 唐玉を 手本に
纏かし 或はこの句白妙の袖ふりか 同年輩
はし紅の赤裳引きといへるあり

（5 八〇四）

丈夫は御蕩に立たし未通女等は赤裳裾引く……

（6 一〇〇一）

……未通女等が赤裳の裾のぬれてゆかむ見む

（7 一二七四）

……船乗りすらむ少女らが赤裳の裾に潮満つらむか

（15 三六一〇）

をとめ等が 春菜摘ますと くれなゐの 赤裳の裾の
春雨に にほひひづちて 通ふらむ……

（17 三九六九）

白妙の 袖折り反し くれなゐの 赤裳裾引き をとめら
は 思ひ乱れて……

（17 三九七三）

等の諸例にみられるやうに、多く、未通女（少女）の服色としてよまれてゐる。云ひかへれば、赤裳は、婦人の、且つ、うら若い時代の姿をあらはす代表的な語として用ひられてゐるのであつて、裳の赤さといふものが、それにふさはしく、華麗な美しい色として、当時の人々に感受されてゐたであらうことが想像される。

このやうに、妙齡の婦人の姿を描くに常套的に用ひられて

ゐる裳の赤さは、屢々男性が情熱の対象として考へる異性と
しての女性をあらはす場合に使はれてゐる。

吾妹子が赤裳の裾の染め濕ぢむ今日の靨深に吾さへ沾れな

(71090)

雨を媒介として作者と愛人が関連をもつてゐるのではある
が、それは単なる雨ではない。赤い裳裾の濡れる雨である。即
ち、想像の中心は、「赤裳の裾の染め濕ぢむ」であつて、雨
↓裳裾のぬれた赤色↓妹↓作者、といふ關係になつてゐる。

妹へのつながりが、赤裳の裾の濡れ濕ぢむといふ感覺的、肉
感的な表現によつてゐる。妹のぬれた雨に自分も濡れたいとい
ふ思ひやりが歌はれてはゐるが、そこには裳裾のぬれた赤
さを思ふことによつて、妹への情熱をかきたてられてゐる男
性の心情が秘められてゐる。民謡風な歌で、当時の大衆の殊
に男性の、裳の赤さに対する情感があらはされてゐる。

住吉の出見の浜の柴な刈りそね未通女等が赤裳の裾のぬれ
てゆかむ見む

(71274)

赤い美しい裳裾を濡らして歩む少女等(土地の娘か、大宮人
かわからぬが)を、柴の蔭から覗いてみようといふ男性の野
性的な感覺がよまれてゐる。裾引いた裳の濡れた赤色に、男
性は少女達への熾烈な魅力を感じるのであらう。裳の赤さは
前と同様。男性に肉感的な感情を生み出させるものであつ
たやうである。勿論、實際にあつた場面をうたつたものではな
いであらうが、このやうなことに興味を持つてゐたとは云ひ

得ると思ふので、裳の赤色に対して持つ感覺も、現実の場合
と大差はないであらう。

立ちて念ひ居てもぞ念ふくれないの赤裳裾引き去にし姿を

(112550)

山吹のにほへる妹が唐棣花色の赤裳のすがた夢に見えつつ

(112786)

裾長く引いた裳の赤色。これこそ、愛情の対象である恋しい
妹の姿として男性の脳裡に鮮明にのこる印象である。立つて
も坐つても寝てもさめても、妹への感情は、赤裳をとほして
高調される。即ち、愛する妹についての何事にも觸れず、最
も深く印象にのこつた裳の赤色に作者の情熱、恋情を托して
表現してゐる。

さらに、赤い裳裾を引いて歩む姿によつて、見も知らぬ婦
人に対してさへ、男性の心は引きつけられる。

級照る 片足羽河の さ丹塗の 大橋の上ゆ くれなゐの
赤裳裾引き 山藍用ち 摺れる衣着て ただ独 い渡ら
す兒は 若草の 夫かあるらむ 櫃の実の 独か寝らむ
問はまくの 欲しき我妹が 家の知らなく

(91742)

道を行く未知の婦人に対して、夫があるか、まだ独身かとい
ふやうなあらはな感情を男性に抱かせたのは、青い山藍摺の
衣によく以合ふ赤色の裳を裾長く引いた美しい姿に原因があ
つたやうである。当時の男性は、裳の赤色によつて、女性へ
の魅力を一段とそられたものの如くである。

以上のやうに、裳の赤色は、うら若い女性の服色として多くあらはれ、特に、男性が、少女として描く場合、屢々用ひられたのであつて、裳に於ける赤色は、男性の野性的な情熱を燃え上らしめたものと推測されるのである。そして、このやうな感情を抱かせる赤さは、長く柔らかにくゆるゆるとゆるめく赤さであり、雨や波に濡れて彩あざやかに見える赤さであつた。即ち、裳の赤さの中でも、特に、男性は、このやうな状態にある場合に強く心を引かれ、刺戟されたらしい。心理学的に、赤色の性格として挙げられる情熱、愛情等が、当時の人々に、このやうな形に於いて感受せられてゐたといへる。この裳の赤さに対する感情は、他の集にはみられぬ万葉の赤色の特性の一つと云へるのである。

なほ、八代集に見える赤裳の歌は、「をふの海に舟乗りすらむ我妹子が赤裳の裾に汐満つらむか〔拾遺集四九三人麿〕「我妹子が赤裳ぬらして種多し田をかりて納めむ歳無の涙」〔拾遺集一一二三人麿〕の二首で、これ等は万葉集の(15三六一〇)及び、(9一七一〇)と殆んど同じと云つてよい。又、十三代集のは、「立ちて思ひ居てもぞ思ふ紅のあか裳たれひきいにし姿を」〔新勅撰集九四二讀人しらす〕で、これは、万葉集の(11二五五〇)の歌とほぼ同じである。このやうに、勅撰集に見られる赤裳は、すべて万葉集から選び入れたものであるから、撰者達にとつて、全く無関心な素材ではなかつたのであらうが、すでに、勅撰集時代の人々に歌材として関心をもたれるものではあり得なかつたのであらう。

う。即ち、裳の赤色は、万葉集に於いて詠まれ始め、又、終つた特殊の物であつた。

次に、「あかき心」は、家持の「族を喻す歌」に見えてゐる。

ひさかたの 天の戸開き……君が御代御代 隠さはぬ
赤き心を 皇方に 極め尽して 仕へ来る……

(20四四六五)

このあかき心は、真心の意であるが、アカキが「赤キ」か「明キ」か両説あつて、いづれとも決められてゐない。万葉集古義には、「赤心は赤と明と通ひて同じ、忠誠にして黒心なき意なり」とあり、倭訓栞には、「あかきこころ、万葉集に見ゆ、赤心をいふなり」とある。評釈万葉集(佐佐木信綱)や、万葉集新講(次田潤)万葉集評釈(窪田空穂)、万葉集全註釈(武田祐吉)、万葉集新釈(沢瀉久孝)は、赤キ。万葉集口訳(折口信夫)、万葉集全釈(鴻巣盛広)、万葉集大成本文篇(佐伯梅友)は明キである。もともと、古義に云ふやうに、赤と明とは語源的に同一とされてゐるもので、両者区別の要はないと思はれるが、私は、赤キではないかと推測してゐる。神代紀廿二「素戔嗚尊対日吾以無黒心云々……天照大神復問曰若然者將何以明爾之赤心」とあるやうに、善、悪といふ心の反対の現象を、色彩語のうちで最も対蹠的な黒、赤によつて表はしてゐるのであつて、黒心即ちキタナキ心に対する善正なる心を赤心で表現してゐるものと思ふのである。黒心に対する心を、宣命などで、屢々、「明

「淨直誠心」と記してゐる。即ち、明心と、赤心とは、同義語として用ひられてゐるやうである。明と赤とは語源が同一であり、赤はアカとよむのであるから、明キと赤キとを置き換へて、赤心と書いてアカキ心とよませても不都合はない、赤キのよみを明キのまま赤キとよませても差支へないのではないかと推測する。即ち、家持のいふ忠誠の心に、赤心を用ひるといふことが、決して不合理であるとは考へられない。ただ、赤といふ形容詞は、万葉集ではすべて独立して使はれず、語幹から直接に下の名詞と熟合した形で用ひられてゐるので、赤心であるならば、アカゴコロとよまるべきであるといふ森本博士のお説（万葉集大辞典ア行）もあり、私も同様に思ふが、しかし、形容詞の語幹と名詞が直結した形で用ひられるのは、赤のみに限らず、白、青、黒等いづれの色彩語にも云ひ得るところである。このやうに、同じ傾向をもつ諸色彩語に於いても、「白キ麻衣」「青キ蓋」「か黒キ髪」等の、名詞に直結せざる活用した異例の形はみられるのであつて、赤のみ全くこの異例がないとは断言出来ないやうに思ふ。又、日本書紀に多く見える赤心をアカキ心と訓んだ例は一度もないが、家持が、はじめてアカキ心と訓んだとしても、それを前例がないからと否定しざることは出来ぬと思ふ。赤に類する色である丹をも、応神紀には、丹心として同義に用ひてゐること等からも、たしかに色彩語、黒に對蹠的な色彩語、赤を、心の反対現象を表現する為に用ひたのだと思ふのである。即ち、色の性格を、心の状態にあてはめたも

のと考へる。なほ、中国でも、赤心は「誠心也」（辞海）とあつて、日本書紀の赤心と同じ意味に解してをり、佩文韻府の心の項によつて調べると「降者更相語日蕭王推赤心置人腹中安得不投死乎」（後漢書光武紀）、「自知言不足采以示蟲蟻之赤心」（又曹世叔妻伝）、「経預御筵醉伏上以齎投琛琛乃取栗擲上正中面帝動色琛即答日陛下投臣以赤心臣敢不報以戰栗上笑説」（南史肅琛伝）、「形者赤漆史官載事以形管用赤心記事也」（古今注）「北園有藁樹布葉垂重陰外雖離荆棘內實有赤心」（趙整諷諫詩）「李相將軍擁薊門白頭惟有赤心存」（杜甫詩）等の例をみることが出来る。しかし、このやうな誠心の意味をもつ明心といふ語は、燕京大學編の論語、孟子春秋経伝、莊子、周礼、儀礼、漢書及補註、史記及注釈、水経注、毛詩説苑等の引得をみても、見当らない。それ故、中国の影響を多分に受けたと思はれる万葉人家持が、赤心といふこの外来語をとつて、古来の日本特有の明心に置き換へ、日本的な訓みと、意味内容をもたせたとみることとも出来る。いづれにしても、只今は、赤キの説に拠つて考察したいと思ふ。

黒によつてあらはされる悪心濁心の反対の善正忠誠の心を赤によつてあらはしてゐるのであるが、この赤は、赤といふ目に見える色そのもの、即ち、色相を示してゐるのではなく、物理的に云つて、明度の面から「明」に通ずる明るさを感じとつて、これを象徴的に心の現象にあてはめたものと思ふ。さらに、心理学でははれる赤色の情熱、活氣、喜悅等の

いはゆる積極的なひたむきな性格をも、すでに万葉人は、この色から感じとつて、同じく心の現象にあてはめてゐたやうに思はれ、彼等の色彩に対する観察の細かさ、鋭敏さを知ることが出来ると共に、生のままの感じを思つたままあらはす素朴さも波みとれると思ふ。翳のない明るいひたむきな心、
「臣」の天皇に対する二心なき専心奉仕の心のありやうを、赤さであらはしてゐることから、当時の人々の赤色に対する情感の一面をうかがひ知ることが出来て興味深いものがある。なほ、赤色の場合ばかりでなく、万葉集には、色彩の表情、或は、性格を屢々直感的に受けとり、これを抽象的な事象の象徴とする方法が用ひられてをり、万物が人間と同等にわけへだてなく扱はれ、すべての物が概念化、固定化されずに考へられてゐた時代の一つのあらはれかもしれないと思ふのである。以後の時代には、激減して殆んどこのやうな現象はみられなくなつてゐる。

最後に、枕詞の中に含まれてゐる赤を考へてみよう。これは、勅撰集には全く見られない赤の用法である。勿論、枕詞そのものの衰微に大きな原因があらう。福井久藏氏の「枕詞の研究と釈義」（不二書房 昭和八年 増補改訂版）によれば、
「枕詞は、万葉集では新たににつくられたもの三二〇種、三代集では二七〇種で、後拾遺集以後は大いに衰へ、只慣用的に随ひ、無意識に用ひるにすぎず、新古今集でも当時の作のあるのは二三首で、以下、十三代集、新葉集を始め家々の集に至るも新らしき枕詞を用ひたるを見ず」とある。勅撰集時代

には衰へて用法も減退した枕詞が、万葉集の時代に最も盛んであつたことが、赤の枕詞の存在に深い関連をもつものと考へられるが、次の例にみられるやうな官能的な表現の枕詞は、勅撰集歌人の感覺をもつてしては詠み得ないところであらうと思はれる。

朱らひく敷妙の子を屢見れば人妻ゆえに吾恣ひぬべし

(10 一九九九)

朱らひく膚に触れずて寝たれども心を異しく我が念はななく
に

(11 二三九九)

この「あからひく」は、いづれも枕詞として、色妙子（敷栲といふ説もある）、膚を修飾してゐるのであるが、歌の内容に全く無関係な形式だけの意味をもたぬ枕詞であるとは思はれない。万葉集古義に、「女子のはだへの雪の如くなるに、すこし紅のほひあるを云へり」とあるやうに、瑞々とした血の通つてゐる美しい肌を連想させられるのである。当代では、美人は「紅の面」「丹のほの面輪」等といはれたやうに、紅潮した健康な肌や皮膚が愛されたやうで、勅撰集の時代のやうに垂れこめた目の目を見ぬ蒼白い生活では考へられぬところである。肌の美しい色を以つて、異性をあらはすやうな官能的、肉感的な表現は、万葉集を含む上代歌人のみのよくなし得るところで、次代の勅撰集歌人には、枕詞の存否にかかはらず、このやうなあからさまな表現は出来なかつたのではないかと思ふ。

輝かしい太陽の光を赤色であらはし、朝、或は、日に「あ

からひく」といふ枕詞を使つてゐるのも、万葉集独特の表現である。勅撰集時代になると朝日の照り初めてから後の朝、或は、日、晝等の用語は、健康な明るい時間の屋外の生活から歌人達が遠ざかつた爲か、万葉集に比べて割合減じてゐる。枕詞の使用が少くなつた上に、さらに生活の変化によつて、これ等の語が減じたので、勅撰集には全く日、朝等に冠した赤色はみられなくなつてゐる。それ故、これ等の語に冠せられる枕詞中に含まれる赤色の用法は、万葉集独特のものとなつてしまつてゐる。万葉人の明るい心、自然に直結した健康な生活が、常に太陽の赤い光と共にあつて、このやうな枕詞を生み出したものであらう。

以上のやうに、肉感的な人間の、或は、明るい大自然の事象の爲の枕詞となつた赤色は、万葉集にのみ用ひられてゐるのであつて、一つの特徴と考へることが出来るのである。

万葉人は、赤色に対して愛好の情を抱いてゐた。善良な翳のない正しい誠の心を赤であらはし、照り輝く朝や日や、生々とした健康な肌を赤で表現した。又、情熱の対象となる美しい若い婦人の代表的な姿を、裳の赤さであらはした。このやうに、万葉人は、赤色から暗い不正のない正しい明るさ、美しさ、情熱、活気等を受けとり、これを愛したのである。万葉人の健康な明るい野性的な素朴な心や生活によく適合した爲に、赤色はこのやうに愛好され、多く用ひられたものと思はれ、他時代にはみられぬ種々な現象を生みだした。

(昭和二十九年九月十二日)

上代文学会会則 (抄)

○目的 本会は万葉集を中心とする上代文学を研究し、各研究団体及研究者、愛好者相互の連絡親睦をはかり、併せて上代文学を普及させることを目的とする。

○事業 本会は左の事業を行う。

- ①研究発表会、共同研究。
- ②研究上の便宜斡旋。
- ③公開講演会、講習会、研究旅行。
- ④外部団体との提携による文化事業
- ⑤機関誌「上代文学」、会員名簿の出版。

○組織 本会は万葉集を中心とする上代文学の研究者、愛好者を以つて会員とする。本部を東京に置き、更に、十名以上の会員ある地域又は学校等に支部を置く。

○会計 本会の会計は会費及び篤志家の寄附による。会費は年額三五〇円(学生三〇〇円)とする。

○会員特典 ①本会会員は、本会の行ふ諸種の会合に無料(又は減額の臨時会費)にて参加出来る。②本会機関誌に自己の研究を発表することが出来る。③本会主催の会に出席する場合公務出張の便宜を取計ふ。④機関紙「上代文学」の無料配布を受ける。

○事務所 東京都杉並区天沼二丁目五六七 上代文学会事務所
(振替口座 東京一八〇六五七)